

# 二学期の抱負とその展開

## 幼児の集団の発達と人間関係を中心に



坂 倉 哉 子

### (一) 二学期をむかえて

「せんせいとあそぶのがええわ、だつてさ、ようけ(多勢)のおともだちとあそべるもんな」といって、いつも教師の手にぶらさがりながら、教師としかあそべなかった幼児たちも、一学期の終わりごろには安定し、友だちをみつめてあそぶことに、たのしきを見出すようになってまいります。

先生は、いつも自分たちを支持してくれているのだ、という安心した気持ちの上で、ひとりひとりがじゅうぶんあそびにとりくめるといふ、もつとも基本的な教師と幼児の人間関係をもつことを中心にして、一学期を過ごしてまいりましたが、その中でわたくしは、幼児たちの示してくれるさまざまな感情や要求に、うまく応じてやることができたであろうか、また、それぞれの幼児が、自己をじゅうぶん表出してあそべるようになったであろうか、など、集団にはいってあそべるような発達の素地ができたかを、もう一度考えて、二学期の実践の出發にしてみたいと思います。

- ・ 口数の少ない幼児、ことばでうまく要求のいえない幼児、感情を表面にださない幼児などには、教師とのコミュニケーションがじゅうぶんできていないこと

・ 教師との感情的なコミュニケーションができていても、集団に対して要求がいえない幼児のこと

・ つぎつぎと友だちを変えて、その関係が一時的であったり、  
変わりやすい関係にある幼児たちのこと

・ ふたりだけの固定化した関係のみで活動する幼児たちのこ  
と

・ いわゆる手のかからなかった、スムーズに集団生活にとけ  
こめたようにみえる幼児たちのこと(そういうったグルー  
プは、教師とのふれあいも、他にくらべ少なく、これでいい  
のだろうか、その奥にあるものに対する不安がある)

などが二学期の出発点にたつて、まず気になってまいります。

これらのひとりひとりが、成長や発達のちがう幼児であり、ひ  
とひとり幼児に應じた指導をするなかで、それらの幼児がう  
まく集団に適應していけるかどうかをたしかめながら、二学期を  
むかえたいと思います。

## (二) 二学期の展望

どの幼児も、二学期になりますと、ひとりあそびでは満足でき  
なくなり、『仲のよい友だちがほしい』『自分の能力にあったグ  
ループにはいって、友だちとあそびたい』いろいろな友だちと  
交わってあそびたい』という要求をもつようになってまいりま  
す。

自分自身の要求や興味によって、自分のはいれそうな集団をえ  
らぶようになり、グループでの活動が、活発さを増してまいりま

す。が、一方では、社会的能力のおくれた幼児や、性格的に問題  
のある幼児は、友だちがほしくても、どの集団にもはいることが  
できず、集団からとりのこされてしまう傾向がみられます。集団  
に対する関係が、ひとりひとりの幼児の発達の差異や、いろいろ  
な意味で問題になってまいります。

・ 能力があわなくて、集団からはずされたり、自分からぬけ  
出す幼児

・ 集団に対して、自分の要求を表現することができず、敵意  
的な感情をもって行動する幼児

・ グループの中心となる幼児の行動と、それをとりまく幼児  
との関係

こういった問題をふくめながら、

・ 幼児は、友だちをどのように求め、集団内でどのように安  
定していくか

・ 集団内でお互いの能力や感情を、どのようにみとめあうか  
・ 交友関係はどのように求められ、広がっていくか、そして、  
それをどのように促してやったらよいのか

などといった面を、幼児とのふれあいの中で、発達のにとらえ  
て、望ましい方向へ指導していきたいと思います。

そして、その中で、教師は適切な援助や助力をし、ひとりひと  
りの幼児が、グループ内でじゅうぶん自己を表現できるようにな  
り、お互いが認めあうような人間関係をつくっていききたいと思

ます。

葛藤はあっても、幼児たちは、お互いに仲間である——経験をともにし、わかち合っている——という満足感があり、ひとりでは経験できないいろいろな経験を、集団の中で、お互いの幼児の交渉を通して得ることができるよう、そういったグループでの経験や活動を支えている幼児と幼児の人間関係といった面を、大切に育てていきたいと思えます。

### (三) 二学期の実践から

きっかけをみつけて、友だちといっしょに、みんなの仲間入りがしたい

まだ集団にはいることのできない幼児たちにとって、ひとりの親しい友だちをみつけてやるということは、その幼児に、自信をもたせるのに大変意義のあることだと思えました。

A夫は、とても気の小さい幼児で、一学期は、ただひとりの友だちS夫よりかかることによって支えられていたようです。

二学期がはじまってしばらくしたある日、

一学期の間は、ブロックとか、積み木とか自由に構成でき、変化できるものが多く使われ、ボーリングはあまり使用されませんでしたので、その日は、それを使ってあそぶことにより、友だちとうまく交わってあそべるようにしたいと思って、ボーリングを

部屋の広いところへ用意しました。

登園してきたAグループのM夫が、早速ピンを並べはじめました。「Mちゃんしようか」とY夫がやってきて、ふたりで玉を投げていました。そこへS夫も「ぼくもいれて」と仲間入りしました。三人は、ピンの並べ方や、ボールをいくつずつもって投げるなど、はなしあいながら、うちとけあってあそんでいるようでしたが、A夫は、いちばん仲のよい友だちのS夫が、ボーリングの仲間入りしたので、そのそばで三人のやっているのを見ていました。そのうちに、あそんでいたボールが、A夫の方へころがってくる、それをひろって、横の方からピンに向かってボールを投げたのです。自分もS夫といっしょにグループにはいってあそびたいようですが、いきなりその仲間に、自分からはいっていく勇氣はなく、横でみていて、勝手にボールを投げたのでした。M夫とY夫が、「あかんやんかAちゃん」「やめよやめよ」と自分たちのあそびのじゃまをされたのでA夫をせめるのです。A夫は氣まずそうな顔をし、外に出ていこうとしました。

教師は、「ここがチャンスだと思い、「AちゃんもSちゃんたちといっしょに並ぶやわ、そしたら入れてもらえるに」といって仲間に入れてもらえる方法をちょっといってさそいかけますと、それを聞いて、A夫の友だちのS夫は、友だちの仲間入りに気がついたように、「Aちゃんおいでよ、ぼくのうしろに並びなよ」といってA夫をさそってくれました。教師がさそっただけでは応じな

かったかもしれませんが、ちょうどA夫にとって、仲間入りした  
いという気持ちがあったところへ、大好きなS夫の声がかかり、  
そのひとことでA夫は力づけられ、S夫のうしろへ素直に並びに  
いきました。

社交性に欠けているA夫は、はじめからおおせいの仲間入りを  
することは困難で、S夫というただひとりの友だちと仲よくする  
ことで安定しているようでしたが、S夫がふたりだけの結びつき  
に満足できなくなり、交友関係が拡大して、もっと多くの友だち  
を求めようになったとき、このふたりの強い結びつきは、A夫  
にとって大いに助けになり、S夫にリードされながら、集団の中  
へ、スムーズにはいっていくことができたようです。

だから、仲よしグループのあそびを、まずじゅうぶんさせてや  
り、その後で、それが閉鎖的にならないようにしなければならな  
いとともに、二学期においても、きっかけをたいせつにし、うま  
く集団にはいれるような場をみのがさないようにしなければなら  
ないでしょう。

また、ふたりグループの仲よし関係が断たれて、その中のひと  
りが、逆に集団からはずされたら、にげ出さなければならぬよ  
うな場に追い込まれることもあると思いますので、これまでの仲  
よしグループの人間関係の発展ということで、その中のひとりの  
交友関係の拡大のチャンスを見のがさないようにして指導すべき  
でしょう。

集団の中で肯定された行動をすることによって、仲間  
にはいれる

自分の要求や興味にあったグループをみつけると、そのグルー  
プに属しているということ、グループの一員であるということ  
で、自信をもち、安全性を感じるようです。

気の小さい幼児は、追隨的にリーダーについている場合もある  
でしょうし、集団にはいりたくても、素直にぶつかっていけない  
で、敵意的な行動に出る幼児もいて、適応のしかたがいろいろで  
す。

園庭のちょっと小高い山の上から、ジョウロで水をまいていた  
幼児の発想から、その水の流れを利用して川作りがはじまりまし  
た。少し硬いどろ土なので、幼児たちは、思いのままに川をせき  
とめたり、ダムを作ったりしていました。下の方では、川の支流  
がいく筋もでき、何人でもそのあそびに参加でき、それぞれが協  
力できる好都合な場になっていました。水を勢いよく流す勾配  
や、ごっそりとえぐられたところは崖の下で、そこからダイヤが  
でてくるんだなどと、うでまくりをして、まったくたのもしいな  
素朴なあそびをくりひろげていました。

そこへ、I夫がやってきて、「なんやこんなもの、こわしたろ  
に」といって、ぺちゃんぺちゃんと足でふみつけているのです。  
みんなが「やめて！ やめて！」とどめているのですが、I夫は

わたくしの顔をみながら平気でやめようとしなさいのです。わたくしに何かいってもらいたいような、助けてもらいたいような彼の表情をみて、T夫もいっしょにあそびたいのだが、みんなにどうやったらいれてもらえるか、自分の気持ちをうまく表現することができずにいるのだなと思ひ、「Tくん、あそこにジョウロが一つほうつであるから、あそこへお水をいっぱいいんできてTくんは水道やさんになってくれない？ 水道屋さんで大変なのよ、すぐお水がなくなってしまうから、ほらNちゃん忙しそうでしょ」というと「せんせいいんできてほしいのかあ」という。「うん、せんせいだけじゃないわ、みんなもくんでほしいわよ」といって、みんなにも彼をみとめてもらえるようないい方をし、彼の役割をみつけて、集団にはいれる入口をおしえてやると、元気に水道の方へかけていったのです。

行動に問題のある幼児たちは、少しでも集団生活の中で、失敗をくり返して友だちから拒否されたり、うらまれたりしないように守ってやらなければならぬでしょう。そして、どうしたらともだちとうまく接していきけるかという方法をおしえながら、みんなに受け入れてもらえるような幼児にしてやらなければならぬと思います。

能力がみとめられることによって集団の中にはいれる

能力がみとめられないままに、集団にはいれなかった幼児も、

ある機会にその幼児の能力がみとめられると、集団にいれてもらえるようになったりすることがあります。

あまり目立たない存在のH子が、製作コーナーで、スチロールのおさしみ皿の中央を両開きにし、その中に入るような小さな紙芝居をつくっているのです。「うちへかえるとひとりぼっちだからわたしはさびしいなあ、つくえをかってもらったから、おともだちができたみたい、おはなをつんできてかぎってあげようか」などといったことがかいてありました。ふだんから口数が少なく、自分の思うことがうまく伝えられないH子の気持ちがよくあらわれているようでした。

今まで友だちのやるあとからついて行動していたH子なのに、この小さな、かわいい思いつきに、思わずわたくしは、「Hちゃん、すてきな紙芝居ね、おはなしもよくかけてるわ」とみんなに聞こえるように読んでやると、みんなもびっくりしたようにH子の顔をみて「H子ちゃんじょうずにつくるな」「ええことかながえたな」「わたしもつころ」などといってH子の行動は、製作の好きな女兒のグループに受け入れられ、広がっていききました。できあがるとリーダー的なK子の発想で劇場ができ、H子もさそって順番にできた紙芝居をみせているのです。

静かな存在のH子は、それまではどんな活動をしていても、友だちとのあそびは発展せず、自分だけの活動として、その中で満足していたようでしたが、作ったものを使って友だちとともにあ

そぶことができるようになり、しだいにそのたのしきを感じるようになりました。そして、その過程で、H子の能力がグループの他の成員たちにもみとめられるようになったようです。

そして、部屋をはずみながらスキップでとびまわるH子の姿をみると、グループの仲間に入れてあそんでもらったことに対するよろこびが表われているようでした。

また逆に、今まで集団の中に属していた幼児が、その集団内の幼児たちと、同じレベルのあそびができず、その集団からとりのこされてしまうようなこともあります。

自分がそのものになりきって「ごっこ」をたのしんでいた幼児たちも、二期は、製作活動を伴って、しだいに現実に近いあそびを好んでやるようになってまいります。

一学期の間、K夫は、「せんすいかんごっこ」「バスごっこ」「基地ごっこ」などと「ごっこ」が大好きな幼児でした。ところが十月の動物園へ見学に行ったあとの日のことです。

Bグループの男児たちが、いすを丸くならべて柵をつくり、その中に入って、ライオンになったつもりで、「おーい、はよみにこんか、ウオー」とよびかけていました。動物園のつもりなのです。見に出かけた幼児たちは、「なんや、そんなかおのライオンてあらへんに、もっとこわいかおしとるに」といったことからお面つくりがはじまりました。

Bグループの子どもはほとんどがお面作りをはじめましたが、

その中でK夫はお面を作ろうとせず、ぶらぶら歩きまわり、積み木で砦をつくりだしました。そして、お面のできた幼児たちが柵で動物の家を作っていると、それに向かってブロックをぽんぽん投げつけているのです。何かあるな！と気がついて、K夫に目をやっているうちに、ふだんからK夫が絵をかくことや、製作のいが手なことに気がつきました。

みんなと同じことがしたくてもできないK夫の気持ちがわかるよううで、何とかすくってあげなければと思い、K夫がわたくしの顔をみたとき「K君いらっしやい、K君もお面つきたいやろ、せんせいを作ってあげよか」というと素直に「うん」とうなずいてわたくしのもとによってきました。

このときは、一応教師がK夫の気持ちを受けとめ、K夫も満足そうに教師の作ったお面をつけてよろこんでいましたが、これから先、このようなことで集団からぬけだしたくなるようなK夫にしてはなりませんし、それには教師のあたたかい援助がなくてはならないでしょう。

一学期は既製のものをいろいろにしたてて、それを使つての「ごっこ」に興じていたK夫ですから、製作活動の少なかつた面もありますが、作ったものを使ってあそぶことの多くなる二期期になって「みんなと同じ能力であそびたい」という要求がつよくなつたとき、みんなと同じことをしてあそべるような幼児にしてやらなければならないでしょう。

交友関係を広める中で、あそびを深めたい

グループ内での友だち関係が固定化してきますと、活動をより活発にするために、より内容を高めるために、より広く多くの友だちと交わってあそびたいという要求をもつようになってまいります。そしてグループとグループの交渉が行なわれるようになってまいります。

はじめは、物を媒介として（たとえば、積み木をとりあつたりして）グループ間の交渉が行なわれますが、だんだんとグループ間の成員の交流が必要となり、成員相互が共通の目標に向かって行動するようになります。そしてその中で、お互いの能力をみとめあうことによって、あそびに深まりができてまいります。

テレビでモーターレースをみたことのある幼児たちの発想で、L字型積み木をもち出し、部屋の周囲を走りまわっていました。何となく騒々しくなったので、教師としては何とかしてやめさせて、別の方向へ活動を向けたいと思っていたときでした。そのあそびをみていた幼児たちが、製作コーナーで空箱ののりものを作りはじめたのです。作りあげると、そのグループの幼児たちも、作っただけでは満足できず、L字型積み木の乗り物を走らせている幼児たちと同じように、作った車を走らせたくて、床の上を転がしていましたが、積み木のグループの勢いがすごいので、空箱の車がこわされそうになってしまいました。

すると、リーダー的なB夫が机を並びかえ、箱積み木をもち出して、机の上で道路を作りはじめたのです。この思いつきに教師もいっしょになって道路作りをしました。このグループの幼児たちは、いろいろと机の上や下をつかったり、ダンボールをもち出してきたりして、立体交差をさせたりしていました。が、ちょうど高いところから床にさがってきたところが、L字型積み木のグループの路線の領分のところとなり、そこへ侵入してしまったのです。そこで、L字型積み木グループのY夫が、「ここはききにほかたちがつかつとったんやぞ」と文句をいいにきました。

つづいてM夫も「あかんぞ、ここからまがつていけよ」と意地のわるいことをいっているのです。空箱車のグループは、勢力的にはL字型グループに今までは押され気味だったのですが、そのとき、L字型グループのリーダー的なE夫がやってきて「ええやんか、ぼくたちももうやめてくるまつくろに」といいたので、このグループの幼児たちも、もう積み木の乗り物にあきてしまったというより、ただ積み木を押しあそぶことにもの足りなさを感じていたのでしょうか、作った車を走らせることにおもしろさを感じて、E夫とともに、空箱車のグループのあそびへ同調していいました。

二つのグループがいっしょになったことによって、急に活気づいたように「ぼくはどうろをもつとながくするよ」と空箱車のグループのA夫も張切り、ガソリンスタンド屋ができた、道路を

直す役とか、ぼくは車を洗う人とか、有料道路の切符を作ったりなどしはじめました。行動的なグループに刺激された空箱車のグループの幼児たちにも活発さがでて、また一方のグループも空箱車の幼児たちの思いつきをみとめながら、あそびが一段とおもしろさを増したようでした。場所のとりあいとか、物のとりあいは、今までにもよく見られたことで、たいていの場合、力関係で勢力の強いグループに支配されてしまうことが多いようでしたが、このころになりますと、お互いにあそびの価値をみとめあえるようになり、従来ならL字型のY夫の主張に、場所をゆずっていたであろうと思われる場面で、リーダー的なE夫が相手のグループのあそびに価値をみとめたことによって、お互いに協力するあそびへと発展していったようであります。

そして、こうしたあそびの中で、今まであまり知らなかった友だちの良さを新しく発見したり、今までのグループ内で出せなかった自分の能力を、新しく交わった仲間の中で表出できるような幼児もあつたりして、お互いのもっている能力や感情を、より広い人間関係の中でみとめあえるようになっていくようです。

そして、協力することの必要が、その場その場の経験を通して、少しずつわかっていくようにしたいものです。

#### (四) ま と め

以上、二学期の実践の一部を拾って、幼児たちの発達していく

過程を、わたくしなりに考えてみました。が、集団的行動の多くな二学期になりますと、幼児と幼児の人間関係の場で、幼児と幼児との交渉を通して発達していくものが多く、ともすると、教師が援助しなければならぬ場面を見落としている場合があるかもしれません。

幼児たちの自主的な活動に押し流されているだけでは、集団内の経験で育つものを、のばすことができずに終わってしまうでしょう。

幼児同士がお互いに自己をじゅうぶん表出し、友だちの能力を正しくみとめ、お互いの感情がみとめあえるような幼児と幼児の人間関係をつくるには、やはり、幼児相互の関係をみつめる中で、教師のあたたかい援助がなければ成り立たないのではないでしようか。

そういった意味からも、幼児と幼児の、あるいは教師と幼児のふれあいを大切に、幼児たちの発達をみつめ、集団的行動がうまくできるような幼児を育てていきたいと思えます。

こうした内面の発達、幼児のゆたかなパーソナリティの形成にとつても大切なことであり、ゆたかな経験を得ることであります。

三学期も、やはり二学期の連続として、集団的行動の深まりを人間関係の中でとらえて指導していきたいと思えます。

(四日市市立富田幼稚園)